

ダニエル書12章2-3節 「終わりにおける報い」

1A 復活による裁き 2

1B 主の甦り

2B 力と権威

2A 永遠の命と忌み 2

1B キリストの裁きの御座

2B 白い大きな裁きの御座

3A 光の輝き 3

1B 思慮深い人

2B 多くを義とする人

本文

ダニエル書の聖書通読の学びは、ついに最後の章にまで来ました。午後に一節ずつ学びたいと思いますが、今朝は 2-3 節に注目します。「**2 地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。3 思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。**」

ダニエルは御使いによって、王たちの戦いの幻を見せられました。その中で、ギリシヤの王アンティオコス・エピファネスが、ユダの民をやりたい放題、迫害し、聖所を荒らしていました。しかし、その中に思慮深い者たちが現れます。神に従う人々です。多くの人が剣にかかり、火に焼かれ、虜となり、かすめ奪われるのですが、それでも人々が真理に目覚め、その思慮深い人々に付いて行きます。それから、終わりの日へと一気に幻が広がります。ダニエルは、アンティオコス・エピファネスのような、非常に高ぶった王が出て来ることを教えられます。反キリストです。それによって最後は、世界戦争へと至ります。反キリストはイスラエルの中に陣営を張って、暴れまわります。ユダヤ人にとってその時が最も困難な時です。そこで主が彼らを救ってくださいます。

そして主は彼らを救われるだけでなく、既に眠っている者、といっても文字通りではなく、死んだ者たちを甦らせると約束されているのです。それが今、読んだ 12 章 2-3 節です。私たちは昨日、葬儀セミナーにおいて、復活の事実と希望について聞きました。今朝は、復活というのは何なのか、何のための復活なのかを見ていきます。

それを一言でいうと報いを受けるためです。言い方を変えれば、全てを明らかにするためです。ある者は永遠の命という報いを受けるために甦り、またある者は、誹りと永遠の忌み、すなわち永遠の処罰を受けるために甦るといことです。つまり、今の時、どんなに隠れたものであっても、そ

れが全て白日の下にさらされ、知られずに行なった良い行ないも、また悪い行ないも、すべて主の前で評価され、それによって報われるということです。神を信じて生きてけれども、試練を受けて死んでしまったとします。しかし主は彼らを覚えておられて、甦らせる時には永遠の命を与えられます。他方で、神を捨てたり、罪と悪を行なった者は、たとえその報いをこの地上に受けることなく平穩に死んだとしても、神はその者を死者の中から甦らせ、そして正しく裁かれるということです。主は、このようにして必ず曲がった世を必ず真っ直ぐに直してくださる時を定めておられるのです。イエス様が、このダニエルの預言のことを思って、こう言われました。「ヨハネ 5:28-29 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」

1A 復活による裁き 2

1B 主の甦り

ところで、力をもち権威のある人が死んでしまうと、人はその空白の中でしたい放題のことをしてしまいます。小学校で先生がしばらく教室から離れた時のことを想像してみましょう。イスラエルの歴史もその連続でした。ヨシュアが晩年に、既にイスラエル人の心が偶像に傾いていることを指摘しましたが、果たして彼らはバアルとアシェラを拝み始めました。それは、そこに主がおられることをもはや信じなくなったからです。その指導者がいなくなったことで、神もおられなくなったと思ってしまうからです。これが人間の罪の性ですね。

この地上で最も力を持ち、力を持っているだけでなく、恵みと憐れみに満ちた方がおられました。イエス・キリストです。この方は、数多くの病を治し、悪霊を人々から追い出し、そして湖の大きな波を鎮められました。生まれつきの盲人も治されました。そして最も大きなことは、ラザロを蘇らせたことです。これほど、力のある方です。しかし、キリストは十字架に付けられ死なれました。イエス様がなくなったのです。しかし、三日目に甦られます。主はご自身が甦られたことによって、「天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。(マタイ 28:18)」と言われました。力と権威のある方が戻って来られたのです。

ところが、教会も誕生してから 60 年程経ちました。その時に、ローマによる迫害が酷くなっていました。使徒の中でヨハネだけが生きています。そして本人もパトモス島で流刑になっています。ところが、主がそこに現れてくださったのです。栄光に輝く姿で現れました。そして言われました。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、身よ、いつまでも生きている。また、死とハデスのかぎを持っている。(黙示 1:17-18)」主は生きておられるのです。けれども教会は、まるで主がそこにおられないかのように活動してしまいました。ある教会は、正しいことを熱心に行なっているのですが、愛を失っていました。ある教会は、不品行を行なってもよい、偶像礼拝を行なってもよいという教師をそのままにしていました。またある教会は、自分たちは生きていると言っているけれども、実は死んでいました。しかしイエス様は 60 年経った時も、

目に見えなくともそれぞれの教会におられ、それぞれを評価しておられるのです。

2B 力と権威

つまり、主が甦られたということは、その権能と力が働いていることに他なりません。アナニヤとサツピラのことを思い出してください。彼らが自分たちの地所を売って、その一部の代金は自分の所に置いておき、全てであると偽って、ペテロなど使徒たちの前に持ってきました。それで、ペテロは、「あなたは、人を欺いたのではなく、聖霊を、神を欺いたのです。(使徒 5:4 参照)」と言いました。そしてその場でアナニヤとサツピラやそこで倒れて死んだのです。主から自分のしていることを隠せると思っていたけれども、主は聖霊によってしっかりとそこにおられ、その知識に基づいてお裁きになります。コリントにある教会に対して、使徒パウロが同じように臨みました。パウロを中傷し、やりたい放題している者たちがいたのですが、こう言っています。「2コリント 13:4-5 キリストはあなたがたに対して弱くはなく、あなたがたの間であって強い方です。確かに、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力のゆえに生きておられます。私たちもキリストにあって弱い者ですが、あなたがたに対する神の力のゆえに、キリストとともに生きています。あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。」信仰に立っていない者は、キリストが生きておられるので、倒れてしまうのだということでもあります。このように、主が生きておられるということは、その正しさと力が働いているということでもあります。

2A 永遠の命と忌み 2

そして主は、私たちを今度は甦らせませす。先にイエス様が、「善を行なった者は、よみがえっていのちを受け」と言われました。そして、「悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです」と言われました。これには時間差があります。初めに善を行なった者たちが甦ります。そして少なくとも千年の期間を経て、悪を行なった者たちが甦ります。

1B キリストの裁きの御座

私たちキリスト者は、天から降りてこられるキリストによって、既に死んだ者も、今生きている者も、空中にまで引き上げられます。「1テサロニケ 4:16-17 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一しょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」既に死んでいる人たちは、必ず復活します。そして生き残っている者たちは、一瞬のうちにして変えられて、天に入ります。生きています者も死んだ者も、必ず甦って、主の前に出るのです。

私たちは、この希望があるので、今、していることが無駄には終わらないことを知っています。「1コリント 15:58 ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですか

ら。」主が戻って来られる時に、私たちはこの地上でしたことについて、報いを受けるのです。キリストにある者は、神によって罪に定められることは決してありません。けれども、まことの報酬を与えます。つまり、聖なる神が私たちをご覧になって、それをずっと見てこられて、その動機までも知っておられて、それで評価をなされます。「1コリント 3:12-14 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。」表向き、何か成果を上げたかのような人であっても、主によらないものであれば、それは火によって清められます。各人の真価の働きを試されるのです。

しかしそれは、罪定めのためではなく、むしろ賞賛のため、褒美のために裁きを行われます。「1コリント 4:5 ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごとにも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」私たちは、甦ると永遠のいのちにあずかります。その時は、各人の信仰の真価が試されますが、それにしたがって神は栄光を与えられるのです。

2B 白い大きな裁きの御座

それでは、自分の義について自分自身に拠り頼んでいる人々、キリストの義ではなく、自分の義を求めてきた人々がどうなるか、見てみましょう。「黙示 20:11-15 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」これが、ダニエルが語っていた、「永遠の忌み」のことです。自分が死んだとしても、自分の行なったことに対する報いは、神が甦らせることによって行われます。キリストの義ではなく、自分自身の行ないしかありませんから、行ないの書によって裁かれ、そして火の池に投げ込まれるのです。

3A 光の輝き 3

そして、永遠の命にあずかる者たちについて、ダニエル書 12 章をもう一度、ご覧ください。「**思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。**」

1B 思慮深い人

主は、あのマカバイ家の人たちのような、たとえ世界が左を向いていても、自分は右を向くというような人々を大空の輝きのように輝かせると約束しておられます。主にあって耐え忍ぶことは、困難の中を通ることでした。いろいろなことがあっても、けれども主は必ず思慮深い人を、大空の輝きのように輝かせてくださいます。イエス様が義の太陽として、神の国で輝かれますが、その輝きを反映して自分自身も輝くようになります。これが、永遠の命の報いです。「そのとき、正しい者たちは、天の父の御国で太陽のように輝きます。(マタイ 13:43)」そして、ペテロはこれが称賛と光栄と栄誉であると言っています。「1ペテロ 1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」

2B 多くを義とする人

そして興味深いのは、それら思慮深い人たちは、多くの人たちが神の真理を悟ることができるようにしました。そのように、「**多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。**」ということがあります。ここから、私たちが単に自分が知恵を持ち、試練に耐え、そして終わりの日に報いを受けるだけではないことが分かります。自分自身が他の人々を義へと導く時に、その報いは大きいということでもあります。皆さんに知っていただきたいのは、主はみなさんを他の人に影響を与えるため、イエス様の影響を与えるために召されているということです。自分自身がイエス様を知るだけでなく、その知った知識によって他の人々がイエス様へと導かれていくということでもあります。そして、そのことによって自分の報いが、世々限りなく続く星のようになる報いがあるということです。パウロが、何を喜びとしていて、誇りとしているのか、テサロニケ人への手紙第一で話しています。「1テサロニケ 2:19 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。」喜び、誇りの冠になるのは、この魂が救われたテサロニケの人々なのだ、と言っているのです。

私たちは、世の価値観によって誤った考えを持つようにされます。信仰というのは個人の中にしまっておけばよいのだ、ということです。私的なものであり、公にするものではないという考えがいつの間にか入り込んでしまいます。「他の人に迷惑をかけるようなことはしてはいけない」という圧迫を受けるのです。しかし、イエス様はただ心の中で信じるように召されたのではないのです。自分が他の人に影響を与えるように召してくださったのです。

そして、「**世々限りなく、星のようになる**」のです。これはメルヘンチックな、星の王子様のようなものではありません。これまで見てきたように、苦難と迫害の中でなおのこと耐え忍び、そして人々を義としていく中で、それで主に与えられるところの恒久の光栄ということでありましょう。私たちは、とても短期的な感情を持っています。今この時に、どう輝くかということを求めています。それで、あることをしてみたり、また別のことをしてみたりします。しかし、星であることは実はそれほど輝か

しいものではありません。もっともっと、光り輝いているものはたくさんあります。星は実は、そんな輝いていません。しかし夜空の中で、いつまでも輝いているものです。ですから、神の与えられる報いとは、華々しいものではないということですが、恒久的、いつまでも続くものということです。

それはあたかも、花火の季節、夜空に輝く星のようであるとある人が言いました。花火の華やかさに人々は集まります。そしてそれに対して称賛を向けます。そして花火大会が終わり、誰もいなくなった時に、淋しさが来ますね。けれども、その夜空には星の光が輝いています。花火が上がっていた時には、その光は見る事が出来ません。花火の光で掻き消されています。けれども、そのはかない、僅かしか続かない花火が終わると、その時に再び光が見えて、真価が試されるのです。